

永原 郁子著

# 「お母さんのための性といのちの子育読本」

評・前島 多恵(看護学生)

本書の著者である永原郁子さんは、神戸にあるマナ助産院で院長として働いています。昭和30年代から病院出産が急増し始め、開業助産師も次第に減っていった時代の中で、1991年8月にこの助産院を開業しました。

2000年からは、助産師の立場から子ども達にいのちと性の大切さを伝えるために、「いのち語り隊」の活動を始めています。

対象は幼稚園から大学の生徒、また教育関係者や保護者などの大人まで幅広く、年間100件以上の出張授業や講演の依頼を受けています。

さて本書の内容ですが、全体を通して、筆者の助産師として、また母親としての優しい人柄がにじみ出ており、「いのちと性」がわかりやすく段階を踏んで書かれています。

生命の誕生は何度聞いても不思議で、神秘としか言えません。受精の時に一組の染色体が出会う確立は単純計算でも70兆分の1だと考えられています。筆者は、この

ことを子どもたちの自己肯定感を高めるために伝えたいと語ります。性に對する筆者の主張は始終一貫しているのです、読む方としては納得がいくし、混乱することはありません。

思春期の二次性徴に限らず、人生には各期に成長課題があるということ、人を愛するために愛の心を育てなければならぬこと、一生を共にしようと思える相手と出会い結婚を誓い、命に對する責任を持つことができるようになって初めて、命を育てることができるといふこと、このような(セックス

スはいのちを産み出す行為であることを含め)当たり前前ことを子どもたちによく分かるように順を追って、また命に「責任を持つ」とはどういうことなのか具体的に説明しながら語りま

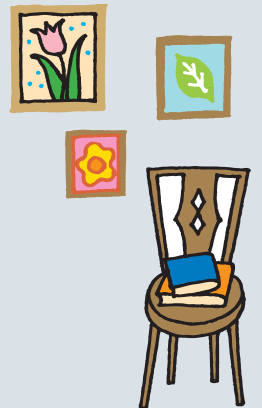
す。そして、親は子どもに「避妊するならセックスをしてもいい」と教えてはいけません。正し

いことをはつきりと教えなければいけないし、子どもも正しいことを教わるのを望んでいると、NO SEXの立場で語り

ます。人口妊娠中絶や性感染症に関することにも触れており、その実態や、どういう対応をしたら良いのかも書かれています。

どういふことばを用いて子どもに性を教えたなら良いのか、具体的方法、順序、またご自身の子育てでの体験談もあり、とても実用的です。

例えば、著者は2歳から4歳の時期が性教育を始める時期だと言います。身の回りの事に對



して「なぜ?」と感じ始める時、母親が子ども「赤ちゃんはどこから来るの?」といった疑問にも答えることができる良いチャンスであり、性教育の最初の先生はお母さんであると励ましています。

将来出産、子育てで悩むことがあった時のために、大切にとっておきたい一冊です。



## 「お母さんのための性といのちの子育読本」

著者 永原郁子  
いのちのことば社  
B6判、160ページ 1,260円(税込み)  
\*本書は、FFJでも扱っています。